

<研究ノート>

## アルガロッティ覚書

近 藤 裕 子

### 目 次

1. はじめに
2. ポウプの洞窟と Camera Obscura
3. チェスターフィールドと紹介状
4. アルガロッティの遺品と大王の妹
5. おわりに

### 1. はじめに

ヴェネツィア生まれのアルガロッティは (Francesco Algarotti, 1712-64) は、フランス・イギリスへの (18 世紀当時の常識とは逆ベクトルの) グランドツアーによって研鑽を積み、プロイセンのフリードリッヒ大王 (Friedrich der Große, 1712-86) の宮廷に伺候し、最終的に伯爵の称号を得た人物であった。さまざまな人々との幅広い交流、事物との出会いが彼の見識を深め、美意識に一層の磨きをかけた。本稿ではいままでの論考で取り扱えなかった、アルガロッティにまつわるいくつかの事象について取り上げたい。

### 2. ポウプの洞窟と Camera Obscura

18 世紀イギリスはその風景式庭園の美学によって、当時のヨーロッパ大陸の美意識 (ヴェルサイユ宮殿の庭に代表される、左右対称の美学) にアンチテーゼを打ち立てることに成功した。風景式庭園に関して、先駆的な役割を果たしたイギリスの諷刺詩人ポウプ (Alexander Pope, 1688-1744) のアルガロッティの美意識に対する影響 (後者の『オペラ論』(1762) にポウプの作品から

の引用があることなど)については、以前に論じ<sup>1)</sup> Camera Obscuraの技法についても取り上げた。

ポープが庭の洞窟に応用した Camera Obscuraの技法は、本来はカメラの前身とされる小型のもの(ボックス型)を考えるのが通常であると思われる。(アルガロッチェも画家に対してこの器具の使用を推奨している。)テムズ河沿いのポープの住まいは公道で分断され、この下に彼の有名な洞窟のトンネルはつくられた。望遠鏡のように反対側の景色も眺められ、両扉を閉めれば暗い部屋(camera obscura本来の意)になって、隙間からの光によって外部の景色が内部に映しだされる仕組みであった。ポープの手紙にその様子は下記のように表されている。

When you shut the Doors of this Grotto, it becomes on the instant, from a luminous Room, a *Camera Obscura*; on the Walls of which all the objects of the River, Hills, Woods, and Boats, are forming a moving Picture in their visible Radiations: And when you have a mind to light it up, it affords you a very different Scene: . . .<sup>2)</sup>

アルガロッチェの渡英(1734-36, 1738-40)の当初の目的は、ニュートン(Isaac Newton, 1642-1717)の光学に関する著作の、イタリア語版のための研究であった。光学については、フランスのヴォルテール(Voltaire; François Marie Arouet, 1694-1778)やフランス語への翻訳を行ったシャトレー侯爵夫人(Marquise du Châtelet; Gabrielle-Émilie Le Tonnelier de Brteuil, 1706-49)からの影響、また経済的支援(侯爵夫人のシレーの館にアルガロッチェは滞在して本の準備を行った。)も看過はできないが、アルガロッチェの下記の文章を読むとき、ポープの洞窟の存在が強くその背景にあることは否定できない。

If to a Hole made in the Window-shutter of a darkened Room, you apply a Lens, and over-against this, at a proper Distance, there be placed a Sheet of white Paper, you will see all the Objects which are without the Window (especially those which are directly opposite to the Lens) inverted and painted upon the Paper with a Beauty, Vivacity, and Softness of Colours, that would make a Landskip, drawn by Claude Lorrain, or a Visto by Canaletto, appear faint and languid. . .

It is impossible to express to you the Pleasure that results from the Motion and Life which animate this fine Piece. The Trees are really agitated by the Wind, and their Shadow follows

1) 拙論「Camera Obscuraをめぐる一考察—ポープとアルガロッチェ—」『東洋大学 経済論集』第27巻1・2合併号, 2002参照。

2) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. G.Sherburn, 5vols. (Oxford: Clarendon Press, 1965), II, p.296. 1725年6月2日付のEdward Blount宛の手紙。(以後のポープの手紙はこの版による。)

the Motion. The Flocks bound upon the Lawns; the Shepherd really walks; the Vessel spreads it's [sic] Sails along the Piece; and the Sun-beams play upon the Waters: Nature draws her own Picture inverted and in Miniature.<sup>3)</sup>

ポウプの手紙やその著作にアルガロッティとの直接的な接触の機会の記述を見出すことはできない。しかしながら、ポウプが住んでいたトウイッケナムから程遠からぬとろにバーリントン伯爵 (3rd Earl of Burlington; Richard Boyle, 1694-1753) のチズィックの館があり、パラディオ様式をイギリスに本格的に導入したバーリントン伯のグループを通じてポウプとアルガロッティは繋がっていたと考えられる。<sup>4)</sup>

自然に倣う、イギリスの風景式 (非整形・非対称の) 庭園の真髄のみならず、また光と camera obscura に関してもアルガロッティはポウプから多くのことを学んだといえるのである。イギリス滞在中、アルガロッティはハーヴェー卿 (John Hervey, 1696-1743) やモンタギュー夫人 (Lady Mary Wortley Montagu, 1689-1762) と親しい交友関係にあったが、後者2人が当時、ポウプとは犬猿の仲であったことを考え合せるとき、人間関係の複雑さを思わずにはいられない。

### 3. チェスターフィールドと紹介状

『ハムレット』に登場するポローニウスを引き合いに出すまでもなく、父親が息子に与える処世術の手引き書は現代に至るまで、さまざまな版を目にすることができる。18世紀における宮廷社会における礼儀作法といえ、チェスターフィールド伯爵 (4th Earl of Chesterfield; Philip Dormer Stanhope, 1694-1773) の名前が挙げられる。ヨーロッパ大陸へのグランドツアーに赴く息子への手紙には厳しいながらも父親の想いが溢れている。

You are not sent abroad to converse with your own countrymen; among them, in general, you will get little knowledge, no languages, and, I am sure, no manners. I desire that you will form no connections, nor (what they impudently call) friendships, with these people; which are, in truth, only combinations and conspiracies against good morals and good manners.<sup>5)</sup>

3) Francesco Algarotti, *The Lady's Philosophy: or Sir Isaac Newton's Theory of Light and Colours, and his Principle of Attraction, made familiar to the Ladies in several entertainments* 2 vols. new edition (London: F. Newbery), 1772, pp.122-23.

4) ポウプは *Epistle to Burlington* [Moral Essay IV] (1731) で自然に倣う庭園観を詠っているが、実生活においてもバーリントンの館にゲストとして食事に招かれるなど、親しい交友関係にあった。また、バーリントンがイタリアから連れ帰り、その建築・造園における協力者となったケント (William Kent, 1685-1748) もポウプと親しく、トウイッケナムの庭園を訪れて洞窟の絵を描いたり、また造園についてポウプの庭園観の影響を受けている。一方、アルガロッティも、後年フリードリッヒからチズィックについて尋ねられるほどバーリントンの館のことを知っていた。

5) *The Letters of Philip Dormer Stanhope 4th Earl of Chesterfield*, ed. Bonamy Dobrée, 6vols. (New York: Ams Press, 1932), IV.

アルガロッチェは1740年に即位したフリードリッヒからの再三の要請に応え、プロイセンの宮廷に赴いた。その後、ドレスデンにおいてザクセン選帝侯のための美術顧問官として美術収集の仕事をし、1747年、再びプロイセンの宮廷に戻って、フリードリッヒ大王から伯爵の称号を受けた。大王が愛したポツダムのサンソーシ宮殿 (Sans Souci) で大王やヴォルテールたちと食卓を囲むアルガロッチェの姿は絵に残されている。<sup>6)</sup>

フランスやイタリアに比べるならば、ドイツは後発の地であった。18世紀の外交方針・戦略においてはブルボン家とハプスブルク家の勢力均衡をはかるといえるのが、その根底にあった。海外植民地での小競り合いも含め、ヨーロッパ内ではポーランド継承戦争 (1733-35)、オーストリア継承戦争 (1740-48)、七年戦争 (1756-63) などたびたび戦争がおこった。プロイセンは文武両道に秀でた啓蒙専制君主フリードリッヒのもと、日の出の勢いで勢力を伸ばしていた。

チェスターフィールド伯は当時、ポープ、またハーヴィー卿とも交流があった。父親として、17世紀の太陽王ルイ (Louis XIV, 1638-1643 即位 > 1715) の治世を頂点とし、宮廷での儀式・しきたりを重んじている (ある意味では飽和状態に達しているともいえる) フランスの絶対王政の観察やイタリアといったグランドツアーおきまりの地だけでは、息子の教育に不十分と考えたためであろうか、あるいはハノーヴァー家から <英語の話せない> 国王をむかえていたイギリスの事情 (フリードリッヒ大王はイギリス国王とも血縁関係にあった。) も考慮してか、息子にはプロイセンにも立ち寄るようにと十二分に指示を出していた。伯爵がフリードリッヒの統治者としての力量を高く評価していたことは次の手紙によく表されている。

During your stay at Berlin, I expect that you should inform yourself thoroughly of the present state of the civil, military, and ecclesiastical government of the King of Prussia's dominions, particularly of the military, which is upon a better footing in that country than in any other in Europe. . . . You must also inform yourself of the reformation which the King of Prussia has lately made in the law, by which he has both lessened the number and shortened the duration of lawsuits; a great work, and worthy of so great a prince! As he is indisputably the ablest prince in Europe, every part of his government deserves your most diligent inquiry, and your most serious attention.<sup>7)</sup>

特にアルガロッチェへの記述がみられないかと期待してしまう箇所であるが、チェスターフィー

pp.1342-43. (No. 1639) 1749年5月15日付の息子への手紙。(以後のチェスターフィールド伯爵の手紙はこの版による。)

6) Adolph Menzelによる *Tafelrunde* の絵。オリジナルは1945年に破壊された。

7) IV. p.1294. (No. 1616) 1749年1月10日付の息子への手紙。

ルド伯は彼の名前ではなく、ベルリンのアカデミーのモーペルトゥイ (Pierre Louis Moreau de Maupertuis, 1698-1759) の名前をここでは挙げ、知己を得るようにとこの記述のあとに続けて、息子に指示している。アルガロッチェの名前は、この手紙から1ヶ月ほど前の息子への手紙の中に出てくる。

There will be, likewise, two letters of recommendation for you to Monsieur Andrié and Comte Algarotti, at Berlin, which you will take care to deliver to them, as soon as you shall be rigged and fitted out to appear there. They will introduce you into the best company, and I depend upon your own good sense for your avoiding of bad. If you fall into bad and low company there, or anywhere else, you will be irrecoverably lost; whereas, if you keep good company, and company above yourself, your character and your fortune will be immovably fixed.<sup>8)</sup>

果たしてこの紹介状は効を奏したのであろうか？ Preuss 版<sup>9)</sup>の大王とアルガロッチェとの書簡にはこのあたりの日付のものはない。また上述のチェスターフィールド伯の書簡集には息子からの返事が収録されていないため、この時点での詳細は不明である。

ただ、チェスターフィールド伯の1749年2月28日付の息子への手紙に、ベルリンでの息子に対する歓迎をうれしく思うという記述があるので、プロイセンの宮廷を訪問したという事実は確認することができるのである。また、3年後の手紙に、“Make compliments from me to Algarotti, and converse with him in Italian.”<sup>10)</sup>とあることから、紹介状のお蔭で息子はアルガロッチェと親交を結ぶことに成功したと判断できるのである。

#### 4. アルガロッチェの遺品と大王の妹

1753年にアルガロッチェはフリードリッヒのもとを離れ、故国イタリアへ戻った。1764年の5月にアルガロッチェは亡くなるが、フリードリッヒ（大王は彼のために立派な墓を建てた。）に絵を遺している。

8) IV. p.1267. (No. 1604) 1748年11月29日付の手紙。同様の内容は1748年12月6日付の手紙にも書かれている。IV. p.1269. (No. 1606)

9) *Œuvres de Frédéric le Grand*, ed. J.D.E. Preuss, 32vols. (Berlin: imprimerie royale, 1846-57). 1748年3月から1749年8月までの期間の大王とアルガロッチェの間の手紙は載せられていない。(以後のフリードリッヒ大王関連の手紙はこの版による。)

10) 1749年2月28日付の手紙はIV. p.1312. (No. 1624) 参照。引用箇所はV. p.1942. (No. 1855) 1752年9月22日付の息子への手紙。

We learn from Italy, that the celebrated Count Algarotti died at Pisa the 22d or 23d of last Month. It is said, that by his Will, he has left an exceeding fine Picture to the King of Prussia, . . .<sup>11)</sup>

この絵はその後どうなったのであろうか？先に名前を挙げたプロイス版のフリードリッヒ大王の著作集、第6巻に大王自身の遺言が収録されている。その11番目の項目に、この絵について次のように書かれている。

Je lègne à ma sœur la reine de Swède une de mes tabatières d'or du prix de 10,000écus, vingt antals de vin de Hongrie, et un tableau de Pesne qui pend au palais de Sans-Souci, que j'ai eu d'Algarotti.

スウェーデン王のもとに嫁いだ大王の妹ルイーズは (Louise-Ulrique, 1720-82)、大王よりも早く亡くなったため、遺言は実行されず、絵はサンズーシ宮殿に残されたままとなった。プロイスの注釈によると、窓に寄りかかる農家の娘の姿を描いた、フランス出身のペヌ (Antoine Pesne, 1683-1757) による作品ということである。ペヌは現在もなお、ベルリンの絵画館 (画家自身と娘たちを描いた肖像画) やシャルロッテンブルク城 (大王と彼の最愛の姉、ヴィルヘルミーネ (Wilhelmine, 1709-58) の子供時代の肖像画) において彼の作品を見ることができる。大王の祖父 (Friedrich I 1657-<1701 即位>-1713) に招聘されて以来、ペヌはプロイセンの宮廷画家として活躍した。現時点では、アルガロッチイが大王に遺言で贈った、農家の娘の絵に関する詳細については、上記の注釈以外のことは不明である。(サンズーシ宮殿を訪れたときに、それらしき絵を探してみたのだが、わからなかった。)

先に挙げた大王の書簡集 (プロイス版) には6人の姉妹との手紙の遣り取りが収録されている。バイロイト辺境伯夫人となった姉、ヴィルヘルミーネは別格の扱いとして、このスウェーデン王妃となった妹ルイーズ<sup>12)</sup> に対しても、政治的な配慮からも大王は大切な扱い方をしていたように思われる。七年戦争当時、スウェーデンはポンメルンの領地回復の目的でフランス側につき、プロイセンとは敵対した。最終的には王妃、ルイーズの仲立ちで無意味な戦争は終わることになるのだが、フリードリッヒにとってルイーズは大切な情報源であったと言えよう。(1747年のプロイ

11) *Public advertiser*, pub. H. S. Woodfall. (London), Friday 29 June, 1764, No. 9257.

12) スウェーデンではロビーサ・ウルリカという名前でも知られていた。啓蒙専制君主のフリードリッヒ大王を理想とし、王権強化のクーデターを計画するなど、その辣腕で (大王との書簡からは想像しにくい) 知られた王妃だったらしい。彼女の息子がのちのグスタフ3世 (1746-<71 即位>-92) で、独裁的な王権を復活するが、最後は暗殺された。彼の側近がいわゆるマリー・アントワネット関連で名前を知られるフェルゼン将軍である。Cf. 武田龍夫、『物語 スウェーデン史』(新評論, 2003)

センとスウェーデンの条約、またプロイセンとロシアの1769年の密約についての話題などが、2人の間の手紙に出てくる。

フリードリッヒはルイーゼには、ドレスデンの磁器（人形）を送っている。また、姉、ヴィルヘルミーネには冬の最中に ananas（パイナップル）が届けられていた。<sup>13)</sup> 確かに当時、各地にオランジェリー（ヴェルサイユ宮殿を始めとし、先に挙げたバーリントンのチズィックの館にもそのスモールスケールのもが見られる。）と呼ばれる、オレンジやレモンを栽培する一画が庭園内につくられていた。本来、地中海沿岸など暖かい気候のもとに栽培される作物のため、オランジェリーではこれらを鉢植えにし、低温の際には、室内の暖かい場所に鉢ごと移させたという。パイナップルは総称がアナナス（科）であるが、15度以下の場所では育たない作物である。また2000を超える種があって、フリードリッヒ大王がどのようなアナナスを送っていたのかは、手紙からは推測できない。

アナナスについての記述は、アルガロッティがその庭園観に深く影響を受けた、ポウプの手紙の中にも見られる。ポウプはアナナス専用の温室を自分の庭につくっていたのである。

My garden, however, is in good condition, and promises fruits not too early. I am building a stone obelisk, making two new ovens and stoves, and a hot-house for anana's, of which I hope you will taste this year.<sup>14)</sup>

産業革命以後、鉄やガラスの大量生産の時代になって、現代につながるガラスの温室（ガラスの大温室も含めて）が出現する。それ以前の温室（オランジェリー）は、使用人の人力によって、日光にあてる時は鉢植えごと外に出し、温度が下がれば暖かい室内（大きな物置、納屋、倉庫のような場所がこのために使われている。）に運び入れるという考え方のもとに作られていた。

## 5. おわりに

イギリス、ドイツと渡り歩いたアルガロッティ。さまざまな人や事物との出会いが彼の見識を深め、美意識にさらなる磨きをかけた。彼を取り巻くさまざまな人間模様こそが彼にとっての真の意味でのグランドツアーといえるのではないだろうか？

(\* 本稿は、平成16～18年度の科学研究費補助金による研究の一環をなすものである。)

13) ルイーゼは1746年7月26日付の手紙でこの贈りものに対して、大王に感謝している。(XXVII-i. p.420) また、ヴィルヘルミーネへのパイナップルの記述は1749年1月19日付の大王から姉への手紙にみられる。(XXVII-i. p.213)

14) III. p.453. 1734-5年3月22日付のポウプからFortescue宛の手紙。